



いしおか ちかし  
石岡 千加史 教授

～ 臨床腫瘍学分野 ～

講義題目

腫瘍内科学の今昔

【略 歴】

|          |                         |          |  |
|----------|-------------------------|----------|--|
| 1984年 3月 | 東北大学医学部卒業               | 2011年 4月 | 東北がんプロ統括コーディネーター(併任～2024年3月)           |
| 1984年 6月 | 仙台厚生病院消化器科              | 2012年 4月 | 東北大学病院がんセンター長(併任～2023年3月)              |
| 1988年 3月 | 東北大学大学院医学研究科修了          | 2013年 4月 | 東北大学大学院医学系研究科地域がん医療推進センター長(併任～2023年3月) |
| 1988年 6月 | 東北大学抗酸菌病研究所附属病院医員       | 2015年 4月 | 東北大学病院副病院長(併任～2024年3月)                 |
| 1991年12月 | 東北大学抗酸菌病研究所附属病院助手       | 2016年 4月 | 東北大学病院臨床研究監視センター長(併任～2024年3月)          |
| 1992年10月 | ハーバード大学・マサチューセッツ総合病院研究員 | 2018年 4月 | 東北大学病院個別化医療センター長(併任～2024年3月)           |
| 1995年 4月 | 東北大学加齢医学研究所講師           | 2020年 5月 | 東北大学大学院医学系研究科教授                        |
| 1997年 1月 | 東北大学加齢医学研究所助教授          | 2024年 3月 | 退職                                     |
| 2003年 6月 | 東北大学加齢医学研究所教授           |          |  |

【研究業績等の紹介】

石岡千加史教授は、1984年に東北大学医学部を卒業後、涌井昭教授が主宰する抗酸菌病研究所臨床癌化学療法研究部門に入局し抗腫瘍性プロスタグランジンの研究で学位取得、がんの化学療法の診療と研究に研鑽を積み、1992年から米国に留学、ハーバード大学およびマサチューセッツ総合病院がんセンター研究員として *TP53* をはじめとするがん抑制遺伝子やその遺伝子産物の機能解析と遺伝性腫瘍の分子診断の研究で成果を上げ帰国後、大学院生を指導し多くの論文を発表した。2003年に東北大学加齢医学研究所教授(病院腫瘍内科長)に就任後は、大腸癌や乳癌の治療および予後予測バイオマーカーの開発、新しいがん分子標的治療薬のシーズ探索、固形がんの標準治療の臨床開発などに精力的に取り組んだ。取り分け、世界初のがんのDNAメチル化体外診断薬の開発や切除不能進行・再発大腸癌の3剤併用による標準化学療法の臨床試験の成果は学会の診療ガイドラインやガイダンスに記され治療成績の向上に貢献した。

石岡教授は、様々な活動を通じてがん対策に注力した。東北地方のがん診療連携拠点病院の整備や質の向上(厚生労働省補助金事業)、東北がんプロ(文部科学省補助金事業)や自ら創立した特定非営利活動法人・東北臨床腫瘍研究会(T-CORE)のがん医療従事者養成事業によりがん医療提供体制の質向上に貢献した。また、わが国が遅れを取った腫瘍内科の整備のため腫瘍内科医会を創設し、

日本内科学会の「腫瘍」領域の開拓や全国の大学医学部での腫瘍内科講座設置に尽力した。この間、4大学医学部の新設腫瘍内科講座に教授を輩出したほか、40名以上のがん薬物療法専門医（腫瘍内科専門医）を養成した。さらに、国や宮城県の審議会の委員として政策としてのがん対策に貢献した。国のがん対策推進協議会と今後のがん研究のあり方有識者会議では、第4期がん対策推進基本計画やがん研究10か年戦略（第5次）の策定に、宮城県がん対策推進協議会の委員（会長）として第2期から第4期の宮城県がん対策推進計画の策定に寄与した。

石岡教授は、学会活動にも精力的に取り組んだ。わが国の3大がん関連学会（日本癌学会、日本癌治療学会、日本臨床腫瘍学会）の理事を歴任し、とくに（公社）日本臨床腫瘍学会では2013年に会長として学術集会を開催したほか、長年理事長を務め、がん薬物療法をはじめ広く臨床腫瘍学分野の発展に貢献した。また、American Society of Clinical Oncology (ASCO) と European Society of Medical Oncology (ESMO) の日本代表国際委員や Asian Oncology Society (AOS) の運営委員を長年勤め、ESMO との協力の下でアジア版がん診療ガイドラインの作成、ASCO と Breakthrough Meeting や Young Oncologist Workshop の企画などの活動を通じて、欧米との学術交流や人材養成を通じてアジアの臨床腫瘍学や腫瘍内科学の発展に寄与した。